

シリーズ

“キラリ企業”

の現場から 第36回

会社の支援サービスをご利用いただいている元気企業を紹介する“キラリ企業の現場から”。第36回目は、スポーツ衣料等のマーク加工で国内トップクラスの(株)エヌエスケーエコーマークをご紹介します。西牧寛次社長に、創業までの経緯や同社の強み、今後の成長戦略などについてお話を伺いました。同社には、事業可能性評価事業や産学連携デザイン開発プロジェクト、専門家派遣事業など様々な会社の事業をご利用いただいております。

優れたマークの技術を通じてスポーツ文化の発展に貢献

株式会社エヌエスケーエコーマーク

新宿区、早稲田の社のすぐ近くに今年で創業25年目を迎える(株)エヌエスケーエコーマークの本社がある。3階のショールームを訪れると、カラフルなデザインが施された水着やユニフォームが置かれていた。同社の事業は、スポーツ用品にマークやロゴ、絵柄等を取りつけるマーク加工業である。メーカーから支給された製品にさまざまな加工方法でマークを取り付ける業者は全国に100数社あるが、同社はその規模、技術力ともに、今や国内有数の企業となっている。さらに同社は新素材を開発し、その販売にも事業を拡げようとしている。



本社ショールーム

スポーツ店勤務から独立、創業へ

学生時代に野球部で活躍し、スポーツに人一倍の愛着を持つ西牧社長は、高校卒業後に、就職した愛知県内の大手自動車メーカーを半年で辞め上京。高田馬場にあるスポーツ用品店に入社した。入社当時は高度経済成長の真っ只中、世間ではレジャーとしてのスポーツが注目され、スキーを始めスポーツ人口は大きく伸びていた。そのため消費者のスポーツ用品への購買意欲もすさまじく、スポーツ用品業界は急成長を遂げていた。

西牧社長は、店頭での接客などで多忙な業務の中、勤務先の社長の理解を得て、働きながら大学で経営学を学んだ。その後、14年間の勤務を経て、昭和59年、現在の事業の母体となるエコープリントを創業する。時はまさにバブル絶頂期であり、スポーツ用品業界は、スキー、テニス、サーフィン等様々なブームを仕掛け、大きな市場を作り上げた時代であった。一方、アパレル業界では、マーク加工の

需要が伸びてきていた。西牧社長はその2つに目を付け、スポーツ用品のマーク加工を始めたのである。

マークの加工方法は、大別すると刺繍、印刷、接着がある。社長は当時、スポーツマークの加工方法としては比較的参加者が少ないシルクスクリーン印刷(注1)に絞って業務をスタートさせた。



西牧社長

顧客ニーズに対応して
マーク加工の一貫生産体制を確立

創業当初は、小売店勤務時代の人脈を活かしつつ、マークの取り付けに失敗した場合の買取り費用が高くリスクの大きいスキーウェアや、マークの取付位置やサイズなどに専門知識を要するユニフォームを積極的に受注することで、徐々に顧客を開拓していった。しかし、市場が成熟してくると、スポーツメーカーやスポーツ市場からの要求が年々多様化し、「シルクスクリーン印刷のみ」では生き残りが難しくなってきた。

そこで、顧客のニーズに臨機応変に対応できるように、社内の変革を進めていった。まず工場の増設。早稲田の本社工場に加え、群馬県吾妻郡に第1、第2工場及び縫製工場を増設して、刺繍加工、プレス加工、昇華転写加工(注2)の生産体制を拡充させた。次に、営業要員も増強。さまざまなニーズに迅速に対応する体制を



シルクスクリーン印刷

構築していった。さらに優秀なデザイナーを採用し、顧客から依頼されることの多いマークのデザイン制作をできるようにした。こうして、デザイン企画から最適な加工方法の実現まで、全ての工程を社内に備える一貫生産体制を完成させたのである。

特定のマーク加工方法しか行なわない小規模の同業他社が多い中、マーク加工における高付加価値化の提案、短納期化の実現、顧客ニーズへの柔軟な対応は大きな強みとなり、現在は国内のほとんどの大手スポーツメーカーと取引を行っている。

マーク加工から素材メーカーへ

こうしてマーク加工業で国内有数の企業となったが、それでも西牧社長は同社の将来性について強い危機感を抱いていた。受託加工という事業形態では現在の売上が限界であると感じていたためである。また、市場の成熟やスポーツ用品の海外生産化が進むなかで、顧客からの短納期、値下げ要求は一層強くなっていた。これまではマーク加工業で顧客の要望に応じてきたが、このままでは自社が成長できない…。そう考えた西牧社長は、社内の将来性のある若手社員が活躍できる、新しい事業を模索し始めた。

そんな折、顧客から競技用水着に取り付けるマークについての要望があった。水着のマークはひび割れや剥離が発生しやすくなっているため、伸縮性に優れた素材でマーク加工して欲しいというのである。

しかしそれまでそうした素材は存在していなかった。そこで同社は、自らマーク素材を開発することとしたのである。



のびのびマークを転写したウェア

そうして資材メーカーとの約2年に渡る共同開発により、伸縮性の大きい転写マーク「のびのびマーク」の開発に成功した。同製品の利点は、マークのひび割れや剥離が解消されるだけではない。印刷ではなく簡便な熱圧着加工のため、型代不要、作業簡素化で、効率も良い。更に多色使いも可能で、デザイン性を高くすることもできる。まさに「ニーズに応えた結果」完成した素材なのである。

公社の支援メニューを活用した新事業展開

新製品が完成し、同社は「素材メーカー」にもなったが、「マーク加工業」とは勝手が違う。そのため西牧社長は「のびのびマーク」の製品特性や構築したビジネスモデルについて第三者に評価してもらい、確実な営業展開へとつなげたいと考えていた。そこで活用したのが公社の支援メニューの一つ「事業可能性評価事業」(注3)である。同社

は、平成21年2月の事業可能性評価委員会にて「のびのびマークの開発と販売」の事業モデルを発表、10名の委員による審査の結果「事業の可能性あり」と評価され、以降3年間、公社の事業支援を受けることになった。

同社は現在、公社の2つの支援メニューを活用して「のびのびマーク」販売の為に基盤を作っている。まず、新規事業を行う前提として既存事業の財務体質の一層の強化を図るため、公社の「専門家派遣事業」を利用した。公社登録の公認会計士の指導のもと、現在、物流コストや販売管理費の削減に努めている。

また、開発した新素材「のびのびマーク」の水着以外の用途開拓を行なうため、公社の「産学連携デザイン開発プロジェクト」へ申し込んだ。このプロジェクトは企業とデザイン系大学が共同で新商品開発を行うものである。同社は、プロジェクトを通じて素材の活用方法の新たな方向性を探りたいと考えている。

グローバル化へ向けて

同社は海外展開にも目を向けている。2008年2月、同社はドイツ・ミュンヘンで開かれた「i s p o」(国際スポーツ用品見本市)に参加した。そこで展示した新素材「のびのびマーク」は海外のスポーツメーカーからも注目され、帰国後も資料請求や問合せがきている。「のびのびマーク」は安全性の国際規格である「エコテックス規格100」も取得した。

今後は、ベトナムに現地法人を設立し現地生産を開始し、マーク加工および新素材販売のグローバル拠点にしていくつもりであるという。更に現在海外の同業メーカーとの連携も予定しており、「マーク」を通じた同社のビジネスは、グローバルな視野で成長を続けていく。

事業戦略支援室 木村正幸

(注1)シルクスクリーン印刷:絹・ポリエステル・ナイロン等の布を枠に張り付け、パターンや文字などをインキの通過する部分としない部分とに製版し、インキを押し出す印刷方法。

(注2)昇華転写加工:専用の昇華転写インクで転写紙などにプリントしたイラストや文字を、ポリエステル加工を施した生地に加熱転写する方式。加熱により気化したインクが生地の内部に入り込み染色する。

(注3)事業可能性評価事業:新たな事業展開を目指す中小企業や創業を目指す方に対し、新規事業の可能性について評価を行い、成長性が高い事業プランに対しては継続的な支援を行う事業。

企業名:株式会社エヌエスケーエコーマーク
 代表取締役:西牧 寛次
 資本金:1,000万円
 従業員数:88名
 本社所在地:東京都新宿区西早稲田1-16-3
 TEL :03-3207-4004
 FAX :03-3207-3339
 URL :http://www.nskechomark.co.jp